総合研究と Hominization 研究会のあり方

河合　雅雄（京大・霊長研）

Hominization研究会も第3回を迎えたが，この研究会のあり方と進め方について，少し言及してみたい。

Hominization研究会は，非常に広汎な分野の緊密な連携を基盤にした総合的研究を目指している。ところで，“総合的研究”という言い方は，最近大変評判が悪いらしい。これは，理念がいかに高尚でも，現実化が困難な場合には，その内容を低俗化し，迷彩化することによって問題をすりかえるという，無責任な一般的姿勢の中に，“総合化”の問題も引きずりこまれてしまったからであろう。

実際に，“総合的”という美名の下に，多くの学問的陋劣が横行したことは確かであった。例えば，科学研究費を得るために，従来しばしば“総合的”という名を冠し，実際の内容は，あるテーマに関連ある研究ボスが集合し，研究費を“総合”配分するにすぎなかったという，好ましからざる事例が多かった。つまり，総合的ではなくて，集合的であったり談合的であったことがいけないのであって，本来の意味における“総合的”という方法には，何のかかわりあいもないことなのである。

こうした騙り的行為を糾弾するのは別途にして，よかれあしかれ総合的研究がクローズアップしたのは，2つの問題を孕んでいると思う。1つは，学問が進展するに従って，分析的になり，特殊化，細分化していく強い傾向の中で，総合化という操業を通じて，個々の分野の機能的連関を再構成し，全体像を構築しようという立場の重要性が認識され始めたということである。もう1つは，にもかかわらず，総合化ということが，いかに困難かという事実を如実に示し，早くも堕落化の方向に向いだしたという現実である。

総合とは，何も難しい定義は必要なく，「さまざまのものを，一つに合せて，まとめあげること」という，中学クラスの辞書の明快な答で十分である。ところが，いったい「一つに」とは，科学において何を意味するのか。それは対象とする問題によって，ずいぶん内容も目的も異なるものであろう。従来のいわゆる総合的研究が，おざなりかつ集合的研究にすぎなかったのは，学問における「一つに」の検討があいまいであり，「一つにするため」の方法が，ずさんであったために，総花的というあだ花を咲かすに終ったのではなかろうか。

hominizationに関する研究は，霊長類学をまさに「一つにまとめあげる」ための，中心的課題である。私たちがこのテーマを霊長類学における旗印として高くかかげるゆえんは，わが国の霊長類学の発展の歴史や世界の霊長類学の動向，さらに霊長類学とは何かという本質に，深くかかわっていると信ずるからである。今はこの問題に深くたちいる余裕はない。ただ一つ具体的な事例をあげてみると，現今霊長類学に関する応用面，とくに医学的応用面が，強調されすぎるという傾向に，私たちは一抹の不安を感じている。アメリカは，霊長類学者の最も多い国であるが，この国の研究所のほとんどが，医学的応用面に強い傾斜を見せていることをみても，如上の傾向を伺い知ることができるであろう。応用面の開発を，いたずらに非難する気持は毛頭ないが，その方面への傾斜が過度になると，霊長類学本来の本質を忘れ，ついには霊長類学全体を，衰退させる結果に落ち入るのを極度に恐れるのである。

我々の霊長類研究所は，霊長類学の応用面あるいは技術的発展を指向するのではなく，頑強に霊長類学の本流を守りぬかねばならないと考える。その本流とは，ダーウィン—ハックスレイ以来脈々と流れている霊長類に関する進化学であり，自然界における霊長類（ヒトを含んだ）の位置づけである。我々は研究所の存在意義を，たんに日本という一つの国の中でとらえることなく，世界的視野の中で考え，位置づけていかねばならない。

総合研究は，よく山登りにたとえられる。何人かが共同して，一つの目的—未踏の山頂をきわめるという—に向って歩を進めねば，成功しないという点でたしかに類似している。しかし，総合研究における共同作業が，登山と異なる点は，登山は“そこにある山”の頂点をきわめることにあるのに反し，総合研究は，共同して一つの新しい山を構築するという点にある。それ故，共同といっても同質のあるいは異質の，さまざまな分野とそれを担う研究者が，有機的な連携をもって作業にあたってこそ，はじめて共同の成果がもたらされ，総合化への道が開けるといった性質のものである。霊長類学の中には，総合研究によって始めて構築される重要な山峰がいくつかある。その中でも，hominization の研究こそは最大の巨峰であり，あるいはいくつもの秀峰の基底部に横たわる山脈そのものであると，私たちは考えている。

今回我々は，総合化と試論的アプローチという，2つの方法を試みた。communication の部で意図したのは，まさに本来の意味での総合化への試みである。communication の研究は，ある分野では幅広く鋭いドリリングがなされているが，ある分野ではまだ緒についたばかりで，その全体的な展開はかなり跛行的である。今回はむしろその跛行的部分に照明をあてることにしたが，この

問題提起をよく消化し，困難な作業を敏腕に司会して頂いた伊谷氏によって，熱心な議論を誘発したことをよろこびたい。

発達の部は，形態と機能の連関について焦点をあてるつもりであったが，世話役の力量不足で，その意図を十分実現できず，司会者に御迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。発達の問題こそ，総合討論の実をあげるには最も望ましい場であるので，次の機会には十分な構想をもって臨みたいと考えている。

脳神経学からの hominization へのアプローチは，非常に重要な分野であるにも拘らず，我国では遅れている分野である。今回はその重要性の認識と今後の展開の仕方を中心に，試論的な場を提供した。重要な問題は，今後とも未成熟であっても積極的にとりあげていかねばならないと考える。

Hominization研究会は，総花的でまとまりがないという批判があることは，よく心得ている。しかし大切なことは，主題の執拗な追求であり，強靭な問題意識の持続性である。現段階では，この研究会の成功不成功を云々するのは早計であろう。造られた山が不成形であったり，川が濁り植生が不毛であっても，一向にかまわない。大切なのは，造山活動そのものであり，内包しているエネルギーを増大させることであろう。参加者の多くの人が，何よりも百花斉放の意義を強調し，できるだけ多彩な分野から，自由な発言が行なわれることを望んでおられるのを知って，我々は大変心強い思いをしている。

それ故，現段階では，でんぐり返し，掘り起こし，積み上げる造山活動を強力に押し進めることが最も重要なことだと考えているが，一方一つ一つの分野を造形し，結晶作用を進めていく作業が必要である。そのために，可能な分野から working group を作り，個別的な収斂作用に入るという方法をとった。今年はその具体的な成果として，「locomotion と posture」に関する working group（世話役 近藤四郎，岡田守彦）が誕生した。それは総合的研究という困難な課題を実現していくための方法としてとられた方式であるが，こうした方式についても，大方のみなさんの強い建設的な批判を頂きたい。